

メキシコシティ郊外の居住区を生き抜く者たちに増殖するマルクスの文化資本

中 田 英 樹

はじめに

2019年3月某日。メキシコシティ郊外の貧しい居住区^{コロニア}にて。夜10時、ボロボロの中国製160ccのバイクを二人乗りして、ヘルメットももちろん被らず、ゆっくりと夜風に吹かれながら、筆者は間借りしているピザ屋の家へと送ってもらっていた。

運転していたのは筆者の調査に協力してくれているボクサー。割れたマフラーからの爆音よりもさらに大きな声で私にこう叫んだ——「ヒデキい、ヘラルド（彼の弟）、どうだった？ オモシレー奴だろ？ あいつは本当に本が好きなんだ。だからあんな難しい考えを怒濤のごとくいつも話すんだぜ。でもな、ヒデキ、オレは残念ながら勉強や読書は嫌いだが、ヤ



写真1 ボクサー「ピエロっち」の暮らす首都郊外の居住区

ツが本から学んでいることを、オレはストリートで学んでいる。そうおもってるんだ」——街灯もまばらな薄暗い通りは、酒だかシンナーだかクスリだか何でもいいが完全に「ラリった」ヤツ以外は誰もいない未舗装の道路。乾季なので泥質の土がカチカチに固まって穴ぼこだらけ。さながらマウンテンバイクの競技会場のごとく、返答しようものなら舌を噛みそうなくらいである。

「ピエロっち Payasito」——そんな愛くるしいリングネームを持つ彼、Payasito Olguin (27歳) は、世界ボクシング協会 (WBC) 傘下のメキシコ・ボクシング協会 (FMB) が運営する団体 (FECOMBOX) の、元国内バンタム級チャンピオンである。とまれ彼はそのすぐ後に、世界の頂点を目指すべく国内王者の座を放棄し、「今度は世界を取る」とカナダへ向かった経歴を持つ。それから10年近く経つ今でも、国内のイベント含めた試合では、ほぼほぼ「大トリ」だ。FECOMBOXのお偉いさんや、年配のボクシング関係者も、彼が試合会場に現れると向こうから「まだ元気にやってんだな」「あのときのあの試合はよかったな」と声をかけてくる。27歳と、ボクサーとしてはかろうじてまだ「旬」の最成熟期だ。

そんな「ピエロっち」だが、彼のこれまでの人生は必死で藻掻く貧乏とのたたかいであった。さながら映画『ロッキー』のように。筆者も何度も彼に聞き取り調査をしたが、『ロッキー』と自分を重ね合わせることはしばしばあった。

その彼はメキシコシティ中心部の通称「セントロ」^dではなく、「セントロ」の人たちでも「あそこは危ねーぞ。気いつけろや」という、東にかなり外れた外縁都市チマルワカン市の貧しい家庭に生まれ育った。だから彼は幼少期から、学校に行きつつも、学校の外ではいつも彼は父親の生業を手伝っていた。ピエロになって。

幼少期から大通りの交差点にてピエロに扮してジャグリングすることを父から教わり、父と一緒に赤信号で止まっている車相手にジャグリングを披露し、チップを稼いで暮らしていた。彼は言う。「働いていた交差点の角には、サッカーのグラウンドがあったんだ。いつも(学校の)級友たちが遊んでるのを尻目にみてたなあ」。

やがては、同じようにジャグリングをして稼ぐライバルが多すぎるということで、ウリ二つの三男(ボクサーの彼は長男)と一緒に全身を銀粉で縫って、大交差点に突如現れる宇宙人さながらの格好でジャグリングを

やったり²⁾、ピエロの化粧をして土日祝日には公園やイベント会場の周りに出かけ、風の強い2月や3月は幼児向けのシャボン玉セット、年末には灯籠を空に飛ばすランタン（天燈）、クリスマスシーズンにはバラの花、といった季節モノを売り歩き、また、同じくピエロの格好をして市内バスに乗り込み、次の停留所までに「ネタ」満載のショートトークをやってチップを稼ぐ³⁾。

このように彼の生きる場は常にストリートにあった。国内チャンプになった今でもそれは同じだ。試合前日の計量を控え、吐く唾すらもないくらい喉が渇くなか、朝から夜9時頃まで、ストリートの大交差点でジャグリングをする。市バスや地下鉄の車内、停留所や駅の入り口、レストランの入り口、何かのイベントで人の集まる所といったストリートで生きる人たち。彼がいったんボクシングから離れれば、こうした貧しい彼ら彼女らこそが、彼の毎日の大切な友人や同志となる。

元チャンピオンとて、決してガレージに外車が何台もある豪邸に暮らしているわけではない。

1. 膨張するメキシコシティの歴史

本稿ではこの兄弟を主人公として取り上げてみたい⁴⁾。だがその前に、大都市メキシコシティの膨張の仕方を概略するとともに、この兄弟が生きる居住区の歴史的特徴を位置づけておこう。

日本でも「メキシコ」という名前くらいは知られていようが、首都のメキシコシティと聞けば、「危ない」「ドラッグが蔓延」あるいは「テキーラとラテンの踊り」などが連想されるくらいか。だからここで少し、この大都会について知っておいてもらいたい点を書いておこう。

ラテンアメリカ最大級のメキシコシティといえば、多くの場合それは、メキシコ州（東京都?）のメキシコ市（都内23区?）「セントロ」のことを指す。本稿では「セントロ」としよう。いくつもの観光名所。至る所にあるコンビニ。かつては13万人を収容していた巨大サッカースタジアム、アステカ・スタジアム。学生数が30万人にも達しようかという、アメリカ大陸最大級の「メキシコ国立自治大学（UNAM: National Autonomous University of Mexico）」。1968年、「トラテロルコの夜」虐殺事件の起きた「三文化広場（La Plaza de Tres Culturas）」——観光業界・学界・政治経済圏・歴史的に語り継がれる場——いずれもがこのセントロにある。

だがもはや何もかもが「満杯」になったこのセントロの社会空間は、セントロ郊外へとこの数十年間、著しく膨張してきた。かつてセントロにあった高級お買い物・御食事・娯楽地帯の代名詞でもあった「ロッサ地域 Zona Rosa」は、郊外の「ここは幕張メッセか」としか思えない新築の巨大なショッピングモールへとその地位を譲り、官僚や議員なども暮らすセントロの高級コロニーも、いまでは空き物件などなく、郊外にビバリーヒルズのような高級住宅エリアが形成されている。

だがもっと重要なのはその逆だ。セントロ内部では抱え込めなくなった膨張する中・下層階級の人口対策として、行政はセントロ郊外に、多くの新興住宅エリアを「設立」した。

「設立」とカギ括弧をつけたのは、碁盤の目のような道路網を設置し、市民会館や公立図書館、あるいはコミュニティの場としての公園を設け、上下水道やガスや電気といったインフラを整備する気など全くなさげな、「とにかく地ベタを設けてそこに放り込もう」という程度の意識で「設置」されたとしか思えない「新興住宅地」だからだ。

現在、メキシコシティ・セントロの東部で言えば、ネツァ (Nezahualcóyotl) はじめ、チャルコ (Chalco)、そして筆者がこの文章を今書いているチマルワカン (Chimalhuacán) といった市 (municipio) が、こうしたエリアとしてしばしば言及される。本稿では、メキシコ「セントロ」から東部のこうした地域への膨張について、最低限この歴史を簡単に説明しておく必要があらう。

一般的に、そして筆者もまた、日本での大学の授業などでしばしばメキシコ州に言及する際には、「ほぼ東京レベルの大都市だ」とまずは切り出す。あるいは「ブエノスアイレスやブラジルのサン・パウロと肩を並べるラテンアメリカ最大級だ」と。人口はおよそ2千万人、セントロには地下鉄網が入り組み、築地市場に行けば海産物なら何でもあるだろうと思うのと同じく、巨大露店市場に行けば、あらゆるモノの(含・違法コピー)商品が手に入る。インターネット通販が当たり前になるまでの「東京に行けば何でも揃う」は、このメキシコシティでも同様だった。

ここで、この大都市メキシコシティに関してだが、スペインの植民地になる以前ではテスココ (Texcoco) 湖の隅っこのごく一部でしかなかったことは重要である。かつては20万ヘクタールを有していたといわれるテクスココ湖は、琵琶湖(7万ヘクタール弱)の3倍近い広さを有し、大都

市メキシコシティはその左下の一角を占めるに過ぎなかった。だからメキシコシティの北東に向かう郊外には、あまりにも広大な湖（やがて水位が下がり始めた時代でも、乾季であれ泥沼地帯でしかない土地）が広がっていた。だから、メキシコ州は地盤が緩く、1985年の大地震の際にも震源地から約350km離れていたとはいえ、地盤が液化化し大惨事となった。

こうした地形的な特徴を有するがゆえに、20世紀も後になるにつれ、メキシコシティはその内部に数多の人口を抱えきれなくなったとき、行政の取った対策はあまりにも明白で簡単なものだった——「ならば周りの泥沼地帯にもう少し土を足して埋め立て地帯を作ればいいだろう」。

こうして通称ネツァ（正式名はネツァルコヨトゥル：Nezahualcóyotl）がセントロの郊外に作られた。たくさんの暮らす地を求める貧困層が流入。観光客などはまず行かない（もっと端的な点は、ほとんど中国人・中華レストランが疎らにしかない）、「よそ者」はまず疑われるか襲われる高い可能性を有する、こうした近郊周縁都市が次々に現れては増大し、さらにその周辺へと、と、メキシコシティはセントロから増殖を繰り返してきたのである。本稿の舞台となるチマルワカン市は、そのネツァもが「満杯」になり、さらにその北東部にできた市のひとつである。

こうした、植民期ではなく20世紀の近代化の時代において新たに現出した都市は、ラテンアメリカの場合すぐにわかる。街の中心がないのだ。多くのラテンアメリカの国の「新興住宅エリア」ではない植民期からの街は、必ず中心部にカトリックの教会があり、中央広場があり、そこから「一番街」「二番街」・「一番通り」「二番通り」と広がっていく。チマルワカンはそういった街並みではない。特にどこが中心なのかもわからない。「チマーリ（Chimali）」という何をモデルにしたのかわからない真っ赤な巨大ロボット（上部に展望台を備える）が一応のチマルワカンのシンボルだとされている。だが、これを囲んだ一帯こそが最も同市中心部の機能が集約された位置にあるわけではない。何らかの都市計画をベースに作られた街ではない端的な証拠である。

2. ボクサー「ピエロっち」とマルキストの彼の弟との出会い

2.1 「ピエロっち」の家への訪問

筆者はこのチマルワカンの住宅街に埋もれた一軒のピザ屋に間借りしながら、2019年2月上旬、日本でのとある共同研究プロジェクトの一メン

バーとしての作業を開始した。住民相手にアンケートを採ったりしながらも、「さてこのピザ屋にいながらにして誰の面白い人間模様を描いてみようか」と虎視眈々に毎日、ピザ屋に食べに来る常連相手に世間話などしながら「網を張って待っていた」。

そんななか、冒頭のボクサーが、ある夜、訪ねてきた。このピザ屋を経営する老夫婦の義理の孫息子にあたる。その訪ねてきたボクサーにも、アンケート調査への協力を訪ねてみた。快諾してくれた。順に質問票に沿ってインタビューしていく。宗教は？今の家は賃貸？——そして職業は？

「ピエロだ」。彼はそう答えた。「？」——すると彼は、首をかしげる筆者をほったらかしてスマホを何やらいじりだした。「ほら、」と彼はYouTubeにある、三本の動画を立て続けに筆者に見せた。

一本目は、バスのなかで彼がピエロの格好をして「ショートトーク」をしてチップを稼いでいる動画だった——筆者の胸中は、「ああ、筆者も乗車中によく遭遇していた貧困層の若者なんだな」。二本目は、全身銀粉に塗って、メキシコ人のYouTubeチャンネル「プーちゃんのラジオ (Puerco Radio)」のインタビューを受けている動画だった。横にはほとんど彼のクローンか？と思いきやウリ二つの弟が同じく銀色の「宇宙人」と化してインタビューに応じていた——「ほお。結構オモシロいな」——筆者は少し食いついた。そして三本目。

全国ネットの地上波でのスポーツ中継で、リングには彼が立っていた。ダイジェスト動画だったこともあるが、物凄いスピードで左ストレート（彼は zurdo: サウスポー）を連打。惜しくも敗戦したもののメディアのフラッシュがバシャバシャと照らされるなか、彼はインタビューに答えていた。⁵⁾

筆者には同一人物には見えなかった。

2.2 マルキストの「ピエロっち」の弟

初めて出会ったそのピザ屋で、筆者は彼の家を訪れる約束をしてもらった。そして数日後、筆者が彼の自宅を訪れた際、彼は自宅敷地内に作ったボクシングジムを案内してくれた。リングまでもが完全自家製である。サンドバッグやボクシンググローブなど、一通り揃えられたトレーニング用具は、どれも数多の汗とともに生徒を成長させてきた、年季の入ったものばかりであった。夜には煌々と電気が輝き、貧素な街灯の微かな薄明るさ

に埋もれた家々に一際目立って輝くお城のようである。とはいえ、この地区のすべての道路が未舗装である。立ちこめる砂煙に乾季特有の（特に2月や3月の）強風は、毎日リングを土俵さながらに変える。だから彼の家屋に関する最優先事項は、とにかくもちゃんとジムをコンクリの壁で囲いたいということだった。

日も陰るころ、生徒たちが集まりはじめた。そしてジムが閉店する午後10時までの間、筆者は初めて間近に見る（セミプロであろうが）生のボクシング（スパーリング）に見入っていた。そんななか、おそらくは初めてなのだろうか、「中国人」を捕まえて質問を自由に浴びせられる機会を得たためか、「ピエロっち」からの指導を終えた生徒たちはたちまち筆者を囲みはじめ、例のもうとつくに胸焼けし尽くした質問の連射を浴びせはじめた。

「日本とメキシコ、どっちがいいと思う？」「ジャッキーチェンは知り合いか？」、そして「メキシコのオネーちゃんと日本のオネーちゃん、どっちが好きだ？」。この最後の質問をしたのは、どっから見てもボクシングとの関係など皆無であろう100kg近い「ピエロっち」（長男）の弟（次男）だった。

そうして筆者が浴びてきた質問を繰り返す生徒たち（とまれ筆者は厄介だとは思わない。もうそんな段階はとつくに超している）の人の輪の外に、パーカーの帽子を深く被り、しかしその陰になった顔から鋭く筆者を見つめている青年がいた。「ピエロっち」に次いで三男、ヘラルドであった。ヘラルドは、「そういう質問は漠然過ぎる。答えることなんてできない。もっと絞って質問しなきゃ。だろ？ヒデキ？」、と弟を後ろに引っ張りやって割り込んできた。「よくぞ言ってくれた！」——そう思った瞬間、彼は口を開いた。

「で、だ。オレも聞きたいことがあるんだけど」(...！)「日本とメキシコを比べて...」(...でた)

そして彼はこう続けた。

「どっちが新自由主義、キツイ？」(...!!)
ネオリベラリズム

とつさに筆者は、完全に上から目線で質問する生徒たちと会話していたことを恥じた。最後列、遠くから放たれた完璧なロングシュートだった。

言葉に詰まる筆者に彼はこう続けた「オマエの宗教は何だ？」「ブディスモ（仏教）だが…」。「そうか。オレはマルキスモ（マルクス主義者）だ」。

2.3 「調査する側／される側」という構図の崩壊

筆者にはものの数分、そのあと話を続けただけのつもりだが、おそらく十数分は話したか。時計はもはや23時近くを指していた。もう「ピエロっち」は筆者を、義理の祖父母の家（ピザ屋）に送らなければならない。早急に「ちょっと個人的にゆっくり話さないか」とヘラルドに再会を乞い、数日後に会う約束をした。フィールドワークの醍醐味だといっている。こっちが観察するつもりが、対象を分析し、分類し、カテゴライズするつもりで用意した枠組みが、瞬間にして木っ端微塵となった。この観察者の意図、分析者の相手を嵌めようとする型からの逸脱を、「それは関係ない」と捨て去るフィールドワーカーにたくさん出会ってきたが、筆者にしてみれば偉そうながら、それは愚の骨頂である。ここからだ。「参与観察者」として出向いて現場に潜入した側こそが、打ちのめされ狼狽える——ここからどこへこの現地調査は向かうのか。こここそが、頭から煙が出るくらい考えるべき局面である。

ここからの調査では、まったく日本から準備して持ち込んだいかなる解釈などは全部ゴミ箱行きだ。残された限られた日数で、何を最低拾っておくべきか。何を押さえておくべきか。筆者にとって完全に行き先のわからない、ただひとつ、それが知的興奮に満ちたものであるとの直感的な確信だけを抱いて、筆者は渋々「ピエロっち」のバイクのタンデムシートに座り、ピザ屋への帰途についた。

冒頭での「ピエロっち」の筆者への発言は、そのときのものである。

その数日後、筆者は「ピエロっち」の弟ヘラルドの家を訪れた。土埃だらけの1KDすべてを兼ねた小さな部屋には、本棚がひとつあり、彼はそこから数冊の本を取り出して小さな食卓に並べた。戦前の資料のように埃まみれの頁を繰れば、いろいろな筆記具で、いろいろな色で、アンダーラインや注記が殴り込まれていた。何度も何度も読み返したことだろう。

とりわけ筆者に印象深く映った点は、「マルクスをより深く知るためにマルクスを勉強する」のではなく「マルクスが、どれくらい自分が今生きている世界のパースペクティブを、新しい角度から捉え直させてくれるか」——つまりヘラルドにおいて「マルクスの勉強」がまったく自己目的化していないことであった。もう少し詳しく述べてみたい。

彼がマルクスに出会ったのは、ある知人が教えてくれたのがきっかけだと言う。彼が実家から独立し、土地を買ったのは6年前。そして別のコロ

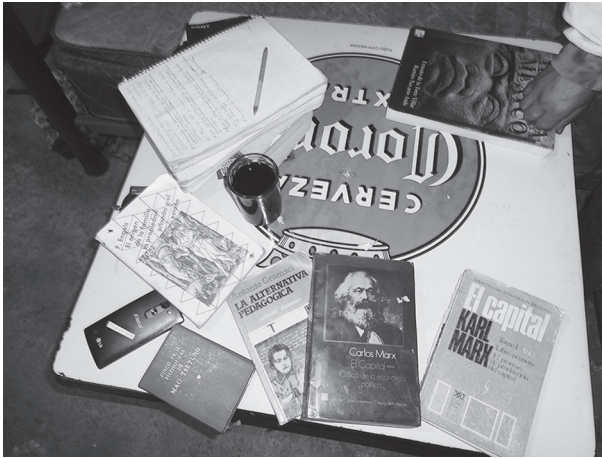


写真2 ヘラルドの家にあるマルクスやグラムシの本の数々

ニーだった。だが半年もしないうちに、政府の「そこは国家の土地だ」という理由のもと、突如住民たちは一斉に警察はもとより軍隊まで出てきて強制退去させられ、今のコロニーに移り住んだ。「ピエロっち」や独立していた次男も同じ境遇に遭った。ヘラルドはその移住の手続きを進める最中、その知人に会ったという。

彼もまた、ジャグリングしたりピエロになったりして稼いだチップが唯一の収入手段であったし、いまでもある。稼ぐお金はすべてコインだ。そんな稼ぎのなかから彼は少しずつ古本屋でマルクスやグラムシ、メキシコの政治闘争の歴史の本を購入してきた。ヘラルドにとっての優先事項は、水道の蛇口がない自宅の居住環境を改善することよりも、マルクスの残した「学的遺産」を軀の中へと、もっともっと取り込むことにある。

彼の家はとても簡素な「間取り」ワンルームのそれであり、ベッドは居間のソファを兼ねている。だがこう筆者が書いたところで、彼は不快には感じないだろう。ワンルームを増築できないのではなく、しないだけだからだ（本稿傍点はすべて筆者）。彼には、それよりも優先される「マルクス（の本）を読み潰す」ことがあるからだ。

だから彼がマルクスを読むのは、「経済的な貧乏」から脱出するためではなさそうに思えた。ましてや「地域住民の啓蒙者になる」ことでもなけ

れば、「政治的なリーダー」になることでもない。入り口のある側面以外の部屋の三面には一面にしか窓はなく、昼間でも薄暗いところで、「じつは彼はあまりピエロになったりとかして小銭を稼ぐのは好きではないようだ。それよりも本が好きなんだろうな」と兄の「ピエロっち」がいうように、黙々とマルクスを読む。隣人たちをオルグするためではないが、とにかくマルクスについて喋りまくり、三軒隣のおばちゃんに「そうよ。いつも彼からはマルクスがどうのこうのと言われるけど私にはさっぱり。ハハハ」といわれようとも、彼はそれを嘆くことは全くなく、本心で「ハハハ」と笑い合っていた。

とにかく彼は、自らの置かれる現状を、そしてその現状に至る半生を、そしてその現状へと導いたメキシコの近代史を、なんとか批判的に捉え直すための糸口を、マルクスの遺したテキストのなかから見つけ出そうと藻掻いているようだった。だが筆者には、彼の向学心がどこから来て何に向けているのかがまったく腑に落ちなかった——結局具体的な解釈にたどり着かないまま、筆者は結局タイムリミットで帰国した。

3. 兄弟において増殖するマルクスの知識

3.1 「腰を上げた」マルキスト

帰国した筆者が、日本で春学期の大学の授業を終えて再び彼の家を訪れたとき、彼のなかにインサートされたマルクスは明らかに変化していた。ヘラルド自身の胎内に根ざしたマルクスについて張り巡らされた思考は、より伸び伸びと思考自らが増殖できる場へと彼を連れて行っていた——近所のいわば「市民学校」に、彼は通うようになっていたのだ。それも少し変わった（口頭での）「契約」方法で。

その学校は公立のものであるが、私たちが日本で想像するようなそれではない。小・中・高・大学コースまでを有する小さな地元の「学びの場」である。日本のいわゆる「一条校」のような学校ではないので、「卒業」したところで履歴書に「箔」が付くわけではない。だから出席してより高学歴を得るためではなく、まさに自らが時間の都合をつけてその毎回での授業の知識に触れるためだけにこの学校に通っている。毎回生徒たちが次の授業で話してほしい先生を決め、招待し、先生は給料などもらうことなく生徒たちのチップだけを手にする。

数カ月前から先生として赴任して常勤するイルマという女性は、ある児

童を「わたしの息子」と言って筆者に紹介した。筆者が屈んで挨拶するも、すぐにその少年はイルマの後ろに隠れた。それは、筆者が胸焼けするほど経験してきたアジア人たる「ガイジン」に対する人見知りではなかった。彼は父親からの虐待を受け、もはや誰と接することにも多大な恐怖を抱くのだ。そんな子供たちを含む小学部・中学部にて、ヘラルドは数学と物理を毎週水曜日に教え、その給料として大学コースの授業を無料で受ける「契約」を結んでいた。聞けば、前回の筆者の自宅訪問時には、「彼はそうよ。いつもマルクスとか言っているけどわたしはあまり興味ないの」と言っていた奥さんもまた、同様の「契約」をその学校と交わしていた。

2019年8月5日、ヘラルドの家を訪ね、いろいろさらに彼に質問をした後、彼は「6時から大学に行くが一緒に来るか？」——そんなことは一言も聞いていなかったが、もちろん筆者はそれに飛びついた。授業は政治学だった。18時に先生が来たときには、生徒は約15人。20歳代の若い女性から、それこそマルクスそっくりの髭モジャのおじいちゃん。日に焼けまくったガリガリの、筆者には僻地農村の農家のおじいちゃんにしか見えない男性。そして（授業終わりに先生が、日本人の筆者が参加したことに引っかけて「今日は非常に多文化な構成でユニークだった」と言ったことで解ったのだが）オアハカ州出身の50歳代くらいの先住民女性、ソチミルコ（Xochimilco）の先住民の血を引く70歳代の老人男性など、日本で筆者が意識を強めていた「社会に開かれた大学」や「住民こそまた主人公であるような大学」といったことはいうまでもない、（大学とその大学の位置する地域の）どちらからどちらへ開かれたのかすらもわからない、「とにかくもそこにそういう場がある」としか言いようのない、地域社会に埋もれた「学びの場」が、確かにそこに存在していた。何度も自分の携帯に電話がかかってこようがブチ切って先生に耳を傾けノートを取り、あちこちでSNSのアプリWhats UPがメッセージを受け取ったとのアラートが鳴り響き、ある若い女性はかかってきた電話に「だからいま授業中だって言ってんでしょ！」と怒ったように囁きながら——この辺がラテンアメリカなのか。誰もマナーモードにすらしていない——授業に「積極的に参加」していた。「授業への出席率ではなく授業への積極的な参加度」や「アクティブ・ラーニング」なんて言うまでもない。先生が誰かを指名するわけでもなく、少しでも先生が「では？」と問えば、我先にと意見が飛び交う——そのように居ていて本当に楽しそうに感じる知的空間であった。

パワーポイントのプロジェクターはおろか、黒板の緑の塗料も剥げているその教室で。

だが、これを書いている今でも筆者は、彼のマルクスへの知的欲求がどこから湧いて、何へ向かおうとしているのかがわからなかった。革命心を露わに、権力家や富豪のやりたい放題に怒りが煮えたぎっている様子もない。ものすごく静かだ。不気味なほどに。だが逆に、現状に諦めてシニカルにこの末期金融資本主義システム、あるいはグローバル化し新自由主義に満ちた同時代を嘆き諦めているのでもない（これは当然だ。でないとは『資本論』を手にとることはないだろう）。

3.2 制御できないマルキストに宿った知的資本

とにかくも、彼のなかに一度着床した「マルクスの知識」は増殖し続けている。その彼の胎内で増殖する「マルクスの知識」の運動を、もはや彼は制御できなくなっているような一言を彼は漏らした。筆者が、「もしこの先、オマエがマルクスをもっと読んでもオマエの生きる場に結びつけられなくなったとき、オマエはもうマルクスを読むことをやめるのだろうか。他の役に立つ誰か思想家を探すのだろうか」と問うた時だ。筆者と彼との対話のなかで、初めて彼は苦虫を噛み潰したような顔をして「難しいがいい質問だ」といいながら筆者にこう言った——「いや、それはない。他の誰かに入れ込んだとしても、そこから源を手繰ればまたマルクスへと行き着くだろうから」——彼が思わずもがな出逢い、胎内に取り込んだ「マルクスの知識」は、その自らが増殖する運動において、彼はもはや「疎外」されているかのようにみえる。彼の「マルクスに関する造詣」たる「高尚」な学的知識の増殖運動は、“インテリの家に生まれた子は、その親のインテリをやはり受け継いでインテリとなる”といったような、限定化され閉鎖的な運動では決してない。投獄された者をしてその者が死に至るまで、その獄中で自身が胎内に取り込まれたマルクスに基づいて世界を「眺め」させ、ノートを書き倒させたように。あるいはドイツにいながらユダヤ人ゆえに迫りくる危機に呼応して亡命しながらも、その者をしてその者が孕み込んだ「マルクスの知識」を亡命人生のなか、同時代を凝視しながら、歴史を理性が整理するあり方を批判的に再検討し、数々の歴史学に関する決定的に独異なテーゼを残させたように。21世紀の現在、新自由主義（NAFTA）によってボロボロになったメトロポリタン、メキシコ

シティの片隅においても、やはりその「マルクスの知識」は、名も無きこの青年に受け継がれる。ますます熾烈化し、グローバル化する新自由主義の現在社会において、そうした社会の特権を享受し「心地よく」「平和に」毎日を暮らす者たちの仕切る場を、この青年に染みついた「マルクスの知識」は、彼をして対象化させ、分析させる。

幼少期から、そうした場で揉みくちやにされ、矛盾を一手に背負わされつつ、毎日交差点に立ち、高級車の窓を叩いてきたこの青年は、経済社会を支配する者たちが、次の世代のなかでその者たちに靡く者へと「既得特権」を受け継がせている「カラクリ」を、すでに見抜いている。社会の利便を享受できる者たちが、その立場をアタリマエの帰結として生きていることが、国籍や人種、出自の家庭などといった「既得」の上に成立していることを知っているのだ。⁶⁾

4. 綺羅びやかな上流階級たちのメキシコボクシング界

4.1 対戦相手の計量オーバー

「ピエロっち」に出会って初めて彼の試合前日の計量に同行させてもらった時だ。計量にパスした彼に続いて、翌日の対戦相手は2kgもオーバーしていた。この時点で「ピエロっち」には、翌日試合をせずに勝ちをもぎ取る権利が発生する。大勢のメディアの前で対戦相手の重量「56キロお〜!!!」とコミッショナーが叫んだ時、先に計量をパスし、メディアからの写真撮影を終えてその場を去ろうと背を向けていた彼は振り返り、苦虫を噛み潰したような顔をした。帰途に筆者が彼に、あの瞬間の胸中を聞けば「カンベンしてくれやあ〜、てめえ (No manches guey)」だったと言う。筆者はボクシング完全に素人だが、彼いわく2kgの差のパンチは全然重さが違うという。「ならなぜやめなかったのだ」と問うたのだが、「さあ…お金も余計に貰えるしなあ」とまったく胸中になさげな理由を付けた。(計量をパスした側が「やる」と言えば、オーバーした側はかなりの「罰金」を対戦相手に払いながら「無かったこと」にして試合をすることができる)。

上で述べたように、「ピエロっち」は派手なパフォーマンスをすることもなければ、威嚇的なタトゥーを入れることもない。ご高齢のボクシング関係者の偉いさんの多くが、こうした「正統派」の極めて紳士的な彼へ声をかけに近寄る。礼儀も正しく寡黙な彼はサウスポー。つまり多くの右利

きのボクサーとは逆にボディ・ブローのダメージが最も大きい肝臓を前に曝け出す。その上での2kgのアドバンテージに目を瞑っての対戦への了承であった。

「打たれるだろうなあ」——声が擦れるくらい水分を絶っていた彼が、少しずつ水を飲み、ようやく舌が回るようになった帰途の最中、「やれやれ」といったように、そう呟いた。でも彼はこう続ける——「でもオレはサウスポーだし相手は嫌がるだろう。そしてオレは打たれ強い。とにかく負ける理由が見つからない」——年齢的にももう、指導者としてボクシング界に関わることが射程に入ってくる年齢である。もはや彼は十分有名だ。ジムを開いても生徒は集まるだろう。指導者としての資格は必要だが、元国内チャンピオンなら容易なはずだ。でも彼は2kgのディス・アドヴァンテージを「無いこと」にして、リングに上がる選択肢を選んだ。娘や妻や親族の目の前でコテンパンにやられる様を見せる可能性は、極めて高いのに。

高級スーツにネクタイを締めたプロモーターや偉い関係者に「頑張れよ」と背中を叩かれ計量からの帰途についた彼に、タクシーが用意されていることはなく、もちろん自家用車で来ているわけでもない彼は、最寄りの地下鉄の駅へと向かった。タクシー代ぐらい奢るからと筆者は言い張ったが、彼は「イランよ。そんなもん」、と。

駅入り口に着いた時、そこにはピエロの格好をして子供用のチョコを売っている太った青年がいた。「ピエロっち」は彼と握手して握り拳を合わせる若者が一般的にやる挨拶をして、筆者に「コイツもオレのダチだぜ」と嬉しそうに紹介してくれた。筆者にはやはり、ここが彼の「生きている」世界なんだなと思った。地下鉄の入り口で出会った彼の友人の太ったピエロは、化粧で涙を書いていた。「ピエロっち」が涙を書いたのを筆者はみたことがない。なぜ気付かなかったのだろう。

(関係者しか入れない) 計量会場で正装した華やかな人たちに囲まれ、筆者には「コイツ、死ぬんじゃないのか?」と思うくらい辛い思いをして(日々追いかけていたのでよくわかる)2日で2kgも落とした彼に、相手は悠々と罰金を払って「イーブン」で戦うという選択肢を享受した。「ピエロっち」にしてみれば、その罰金の金額は、払ったら来月どうやって生きるのがかとなるくらいの額である。相手にしてみれば痛くもかゆくもなかるうが、それをルール上で決められたことだからと「アタリマエ」のように

選択したことそのものへの、いわば「軟派な魂」を、「ピエロっち」は完全に上から目線で対象化しながら、「相手をしてやることにした」と言わんばかりだ。「ボクサー界のピラミッドなんてそんなものさ」と了解しつつも、「絶対勝ってやる」と。そして彼は翌日、3ラウンドKOで見事に相手をブチかました。

新自由主義の格差社会の底辺で、いつもに楽しげにすることが（楽しげであることが）問うてはならない前提であるピエロの兄弟。方や激しく殴り合い、方や黙々とマルクスを読む——周りからの見た目は違えど、周りとは対話している時の彼らの眼底からのレーザービームのような光は、熱を持つこともなく静かに鋭く相手をロックオンする——おまえらがアタリマエのように好き勝手に牛耳る場を、少なくともオレは見てるんだぜ。

4.2 「ピエロっち」の背負う「ピエロ」

2019年8月9日、「ピエロっち」は、ネットのどこに落ちていたのかは知らないが、Face Bookの彼のページ上にて、「富めるメキシコの富はわずかな人たちの手にある」というタイトルの記事をシェアした。そこでは例えば、「大手大規模スーパーではなく、地元の市場や露天市で買い物をしよう」「ちょっとした買い物は近所の大手チェーン（Wall Mart傘下の多国籍店舗等）のコンビニではなく雑貨屋で買おう」、そして「とにかくもメキシコ産を買おう」——そうしたら少しずつ、富はメキシコの多くの人に戻ってくるだろう、と言う主張の記事であった。

どちらかと言えば、彼もまた「スマホ依存症」で、少しでも暇があれば、Face Bookや、Whats Up（日本での「LINE」のようなもの）をチェックして、一日にいくつものポスティングするタイプの人間だが、ほぼすべては自分のボクシングに関する記事ばかりだった。だがこの数カ月、メキシコの政治社会的なことに絡んだ投稿をしはじめ、今朝に至っては明らかに上記のようなポスティングをするようになった。

これは、弟ヘラルドが上に述べた地域の市民大学に、「私には余り興味が無いの」と去る3月には述べていた妻をも巻き込み、出入りするようになってからのことである。弟ヘラルドがどのように兄や妻を刺激したのかは知らないが、こうして少しずつヘラルドの身の回りの人たちが、新自由主義で糞味噌にボロボロにされたメキシコ底辺社会に対して、正対するようになっている。



写真3 交差点でのジャグリング披露

これを筆者が調査日記に書いた翌日の土曜日の朝、「ピエロっち」がこのピザ屋にやってきた。明日、日曜日は朝から、筆者に写真を撮らせるために数時間、弟ヘラルドと一緒に全身を銀で塗っての交差点でのジャグリングしに行き、筆者を連れて行ってくれるという——「カメラでもタブレットでも何でも持ってきていい。襲われたりしないかなんて心配は無用だ。だってあそこ（彼らがジャグリングする交差点一帯）でのヤツら、全部オレの「ダチ」だから」——こう彼は、安心しろとばかりに微笑んで筆者に言った。交差点には、事故か何かで片足の膝下を失ったおっちゃんや、車椅子に座ったオジちゃんやが停車中の車を回ってチップを集めていた。まだ長く残っているシケモク（煙草の吸殻）をくれたり、みんなとても筆者に優しくしてくれた。

5. リングネーム「ピエロっち」の「ピエロ」

この彼の誇らしげな「ドヤ顔」は、決して元国内バンタム級チャンピオンとしてのそれではない。彼がメキシコシティ郊外のこの貧困エリアにて生き延びる、数多の大通りで僅かなチップで生計を立てている人たちの間で、「ピエロっち」として自分がいかに有名か。その「ピエロっちい！ピエロっちい！行けえ！打ちのめせえ！」と煌びやかな大ホールのリングで

地響きが鳴りそうなくらいの声援を受けるときに叫ばれる彼のリングネーム「ピエロっち」の「ピエロ」そのもの——幼少期からのストリートで育った彼の人生が獲得した、貧困層の人たちとの人間関係である。

また別の日、「ピエロっち」が、義理の祖父母であるピザ屋にやってきて、置かせてもらっているジャグリングのための脚立や、全身を塗りつぶす銀の塗料などを準備しているあいだ、彼と会話を交わしていた筆者は、ふと隣に見たことのない若者を彼が連れてきていることに気付いた。遠慮がちにパーカーのフードを被りこんでひっそりと部屋の片隅に座っていたので筆者はしばらく気づけなかった。

「ん？ トーニョ（「ピエロっち」の本名）、彼は？」

聞けばこの若者、5カ月ほど前から彼のボクシングジムに通いはじめた同じ貧困コロニーの少年だという。歳は14歳。彼はしかし、お金を稼ぐ手段が見つからないので、「ピエロっち」のボクサーとしての生徒としてのみならず、彼に交差点で小銭を稼ぐ「ピエロっち」の「ピエロ」となるための生徒としてもトーニョに弟子入りしたのだ。今日がその初日だという。

この少年自身にジャグリングを教えるのは「まだ早い」との「師匠」「ピエロっち」の指導より、まずは小銭集めなどの「下修行」から始めるという。これはいいアイデアだ。「ピエロっち」一人では、信号が変わる十数秒前にジャグリングをやめ、停車していた車を回りチップを集め、歩道に止めている彼のバイクに掛けた袋へコインを投げ入れ、また交差点の真ん中に戻らなければならなかったのが、この「弟子」により仕事がスムーズに運ぶ。この「弟子」は、自分が「助手」として居なければどれほどのプロセスをスムーズに「ピエロっち」がやらなければならぬかを体感するだろう。

この少年は、あの大ホールで煌々とライトに照らされ戦う「ピエロっち」が、なぜ「ピエロっち」と呼ばれるのか、その「ピエロ」としての彼のリングでの雄姿に至る、ストリートで毎日「ピエロ」として生き延びようとたたかってきた姿をもまた、「ピエロっち」の背中から学ぶことであろう。ワイワイ言いながらサッカーをする友達たちの傍らでピエロの格好をして交差点でジャグリングをしてきた「ピエロ」としての「ピエロっち」を。そしてリングに立って何度も勝ち続け、トロフィーをいっぱい貰いながらも「それがなあ…全部生活費のために売っちゃったんだ（笑）」

と、今では家にチャンピオンベルトしか飾られていないボクシングの先生としての「ピエロっち」を。

そうするうちに、トーニョも準備していた手を休めて筆者と椅子に座り、少し話し込みはじめた。そして筆者が「月曜日にはまたヘラルドが大学に行くのについて行くんだ」というと、彼は「じつはオレもその市民大学に行こうかと思ってる」と切り出した。

「それはヘラルドに触発されてのことか？」——筆者は即座にこう聞いた。「そうだ」と言う。

そこで筆者は、上記のように彼が昨日、彼にはなかった政治的社会的なポスティングをFace Bookにしたことに言及した。「あんな今までなかっただろ？〔つまり、政治的なポスティングなどしてこなかっただろ〕。だいたいオマエのボクシングのことか、ネットサーフィンをして見つけた滑稽なホームページのシェアだっただろ」、と。やはり「ピエロっち」はヘラルドの影響を受けていることの発言をした——「そうだ。やっぱりオレもオモシロ可笑しいことばっか〔Face Bookなどにポスティング〕してないで、少しは〔こういうことも〕考えようと思って」。

6. プロジェクトとしてたたかう彼らの生きる場

20世紀のとりわけアフリカやラテンアメリカなどにおける革命武装闘争の歴史を、現在から過去化して免罪するのでもなければ、過去のものとして皮肉るのでもない姿勢にて叙述し直したプラシャド (Vijay Prashad) の傑作『褐色の世界史』の「訳者あとがき」において、訳者栗飯原文子は次のように述べる。

ファノンの言うように、第三世界が「プロジェクト」であるのなら決して消え去ってしまうことはないのである。おそらく、かつて志されたその本来の理想と精神は、インドの森、パレスチナの街頭、その他あらゆる場において継承され、人々は自らのためだけでなく、世界の希望のために、「人類に対する道標」を示すために、戦っている。(Prashad, 2013[2008]: 432)

プラシャドが多く依拠したファノンの言う「第三世界」が、第二次世界大戦後の冷戦構造の直中であつての「第一」「第二」に続く「第三」の地

政学的な諸国ではなく、「第一」でもなければ「第二」でもない、それらの批判の上に予見した「もう一つの別の未来」へ向けての「プロジェクト」であることを、栗飯原もまた「訳者あとがき」にて繰り返す。

おそらくはその「プロジェクト」は余りにも大きく困難なそれであろうが、栗飯原の例える「インドの森」や「パレスチナの街頭」に加え、キューバ革命のきっかけとなるゲバラとカストロが出会ったここ、メキシコシティの郊外の片隅にて、ヘラルドは「第三」の未来への「道標」を探す「プロジェクト」をはじめたのだ。

そして、いまに至る数え切れないほどの「プロジェクト」が、多大な痛みと苦痛、苛立ちと諦めのなかで碎かれたり挫かれたり、腐ったり霧散したように、このヘラルドのそれもまた、同じ途を辿るかもしれない。だから筆者は、ヘラルドが相変わらず、幼少期から習得してやってきたピエロに扮してのチップ稼ぎをやめないこともまた、彼の過去ではなく「プロジェクト」のひとつに見えて仕方がない。プラシャドも言うように「第三世界」という「プロジェクト」が往々にして経済的な側面を決定点として描いてきたように、近代の諸矛盾を課されてきた周辺からの「プロジェクト」では、まずもって「貧乏か否か」を忘れるべきではない——まずもって明日の口に糊する道を用意する——社会のマージナルな境界線にて、支配する者たちに都合よく、弾き出されたりあるいは取り込まれる毎日を繰り返す者にとって、次に自らが直面する様々に想定される事態の、最悪のそれへの対処を、ヘラルドは常に意識しているからだ。

生き延びることが大きな毎日の目的そのものである者たちは、最悪の事例が起ころうが明日を保証する担保を守りながら、あるいは新たに創りながら、周辺部に置き留めておこうとする資本主義経済の中心部からの引力を打ち破ろうと常にジャブを繰り返す。「幸せはお金では買えない」とはよく耳にするが、これは「お金を持っている者たち」が特権的に言えるセリフである。お金を持ち得ぬ者たちは、「買える」「幸せ」を具体的に先見できない。他ならぬこの意味において、ヘラルドは「富が得られないようになっている」近代とはまた別の、まだ見ぬ「幸せ」の未来を、すなわち「人類に対する道標」を、他の誰もが代行できないやり方で模索するのだ。

繰り返すがこれは、文句のない経済環境にある者たちの唱える「脱成長」や「脱近代」とは決定的に違う。環境に負荷をかけたがゆえに実現した経済成長の恩恵を散々享受した経済大国の識者が、近代の恩恵を一度た

りとも受けたことのない途上国の貧農に「環境主義」や「脱経済至上主義」を唱えるのと同じように。

7. 異なる未来を模索する「ピエロっち」

2019年12月20日に「ピエロっち」は、メキシコ・ボクシング協会の国内バンタム級チャンピオンに再チャレンジするという。彼はもう27歳。ボクサーとしては「旬」も終わりかけの頃で、これが最後のチャンスだと彼は言う。前回国内チャンピオンを取った時には、すぐにその座を捨て、カナダにて世界レベル（世界ランキング）のヒエラルキーに飛び込んだが、結果、一勝二敗でメヒコに戻らざるを得なかった。

彼はスマホに保存してある、ジェット機の翼が映り込んだ飛行機の車窓からの写真を筆者に見せた。世界チャンピオンを遠望し、まずはメキシコの国を出てカナダに行く時のフライトだ——「これはオレの初めての飛行機だったんだ」。筆者が冗談交じりに「怖かったか？」と返すと彼はこう言った——「いや、それよりも〔カナダで世界一を目指すことからの〕アドレナリンで高揚していたな。オレもまだ若かったんだな」——だから2019年末に、再びチャンピオンに返り咲ければ、何度か国内で防衛戦を耐えて、世界（ランキング）レベルである程度のポジションまで上るつもりだという。

とまれ筆者が2020年3月、彼に確認したところによれば、残念ながら結果は判定負けとなったが、また再チャレンジをすることを彼は望んでいるという。とまれ皮肉なことに現状（2020年4月12日では）コロナウィルスの影響によりメキシコでもこうしたイベントの自粛が解かれて再開される目処はわからないとのこと。

「もう若くはない」次の再チャレンジでは、前回とは異なるはずだ。もし彼が、弟ヘラルドとともにこの先、その市民大学に通ったり弟と社会について議論をするなれば、今度彼が、再びチャンピオン戦のリングに上がる時には、「ピエロ」での路上での半生を背負いながら、「ピエロっちい！」という大歓声に囲まれつつ、そして、その彼のセコンドには、ヘラルドや「ピエロっち」とともに鼓動を刻みはじめた、メキシコシティ郊外の片隅に生きるマルクスがいるだろう。

それが、「ピエロっち」にしかできない、この新自由主義の矛盾に溢れた現代世界資本主義システムとの「たたかい」に他ならないはずだ。

かくしてヘラルドは今一度、筆者を戒める。彼がマルクスを「研究」するその「研究」は、間違ってもマルクスを神のように措き、彼の遺したテキストを聖書のごとく読み込み、マルクスを信仰することではない。彼にとってマルクスたる「神」は、手の届かない雲の上にはいない。彼の日常における大切な人たち、生き抜く彼を取り巻くすべてのものとの関係性のなかに、彼の「神」は在る。

筆者もまた「研究者」として彼と親交を深めていくのであれば、そして彼と連帯したいのなら、わたしのやるべきことは、わたしがわたしの「研究」として、わたしの大切な人たちとの関係性のなかで「書く」ことで、わたしなりの立場から共にたたかうことにあるはずだ。それができるのか否か。それはわたしのこれから関わっている。

連帯したいのであれば、わたしは彼に問われ続けなければならない。

注

- 1) かつてはDF: Distrito Federal。今ではCDMX: La Ciudad de Méxicoと改名されたが、その中でもあえて「セントロ」と呼ぶ場合、それはさらに中心部の「歴史的な中心 (Centro Histórico)」のことを指す。本稿では文脈での意味合いに色合いを持たせるよう「セントロ」とした。本稿の舞台はチマルワカン市というメキシコ州だがこの「セントロ」ではない。筆者の抱くイメージとしては、東京23区に対するその外の各市町村、つまりメキシコ州チマルワカン市といったものである。
- 2) インタビューを受けている右側が「ピエロっち」、左側がマルキストのヘラルド：“Espejo y reflejo, expresión de la calle,” YouTuber Puerco Radio, (<https://www.youtube.com/watch?v=3Sl7rt4qY5E&t=8s>, 2020年4月11日閲覧)
- 3) “Antonio el payasito olguín,” <https://www.youtube.com/watch?v=-BlXmH7W1Wc>, 2020年4月11日閲覧
- 4) 本稿は、有志舎のブログにて掲載されたエッセイをもとに、加筆・改稿したものである（中田英樹、2019年『別冊 Cross Roads WEB』、有志舎https://note.com/yushisha1890/n/n1000f879e593?magazine_key=m2e38fb97d0e1, 2020年4月11日閲覧）。また本稿は、文科省科研費（課題番号：17H01657、基盤A、研究分担者）の助成を受けて書かれたものである。
- 5) “Antonio Payasito” Olguín lamenta derrota,” (<https://www.youtube.com/watch?v=-D3Cb8YSn68&t=20s>, 2020年4月12日閲覧)「ピエロっち」および

彼に関する数多くの動画が、彼のプロモーターである、Boxeo De Nocaut Informa事務所に所属し、彼のボクシングに関する動画や、試合の宣伝を担当している。

- 6) このブルデューに絡んだ解釈——ある「場」において、そこの特徴を「知っている」者たちとは、そこで再生産された者たちではない。その者たちはそこを「アタリマエ」として生きているからであり、その「場」のハビトゥスと異質なそれを体得してきた者たちこそが、その「場」を対象化し「知る」ことができる——本稿における筆者のブルデューに関する解釈は、(中川、2012) や (Bourdieu, 2004) などに基つきながら (石岡、2017) などの論考にまとめてきた石岡丈昇からの私信メールを介してのアドバイスをベースとした筆者のそれである。

文 献

- 石岡丈昇、2017年「癖の社会学」『現代思想』、特集：社会学の未来、45-6, pp. 125-139.
- 中川 理、2012年「〈遅れ〉を書く」富山一郎・田沼幸子編『コンフリクトから問う—その方法論的検討』大阪大学出版会。
- Bourdieu, Pierre and Abdelmalek Sayad. 2004. "Colonial Rule and Cultural Sabir," *Ethnography*, 5(4); Sabe Publications, London, Thousand Oaks, CA and New Delhi, pp. 445-486.
- Prashad, Vijay. 2008. *The Darker Nations: A People's History of The Third World*, The New Press, New York. (粟飯原文子訳、2013年『褐色の世界史—第三世界とはなにか』水声社)